

外交史・国際関係史と国際政治学理論 国際関係論における学際アプローチの可能性へむけて*

篠原初枝[†]

History and Theory: Towards an Interdisciplinary Approach in International Relations

Hatsue Shinohara

Some historians and theorists in the study of International Relations have engaged in a dialogue to investigate differences and common ground between the two fields. This study aims at examining how historians in American Diplomatic History such as Melvin Leffler and John Lewis Gaddis have referred to, and have used theoretical concepts and frameworks in their work, and discusses its relevance in the writing of history. My examination has revealed that American diplomatic historians in general agree that theory, and its use can be accepted as one of the perspectives in their research agenda. Historians, however, who use theory, show a tendency for eclectic research approaches and as a result, theory-inspired historians are influential and widely read despite remaining a minority in terms of numbers.

Through this paper, I argue that dialogue between the two fields indicates further possibility of an interdisciplinary approach that includes history, political science, international law, economics, and other fields in expanding and enriching International Relations as a whole.

はじめに

国際関係論において、国際政治学理論（以下、理論と略記）と歴史研究について、これまで主としてアメリカやイギリスにおいて、その差異や共通点を探り議論するという試みが存在してきた。*International Security*の特集や、エルマン (Colin and Miriam Elman) 編の著作はこのような試みの成果である。このような試みでは、歴史学と理論の共通性や差異を比較検討したり、あるいは個別の歴史的事例、たとえば第二次世界大戦や冷戦について、歴史学者と国際政治学者が議論を展開し、その方法論や解釈が比較検討されている¹。

加えて、個々の歴史家が理論を批判的に検証する場合もあり、外交史家シュレーダー (Paul Schroeder) は、ネオリアリズムの妥当性を歴史的事例に即して検討した。シュレーダーは、ネオリアリズムが主張したように、国家は大国に対抗して勢力を結集するわけではなく、むしろそれぞれ得意な機能を有して「専門化」することを歴史的に論証し、ネオリアリズムは「非歴史的 (non-historical)」, 「反歴史的 (anti-historical)」と結論づけた²。筆者も、理論と歴史研究の接点という問題意識から、コンストラク

[†] 早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

* この論文は、2007年度国際政治学年次大会「ディシプリンの対話」部会報告提出ペーパー、「外交史・国際関係史と国際政治学理論：理論は歴史研究に有用か」を加筆、修正したものである。

ティヴィズムと歴史研究について小論を記した。コンストラクティヴィズムにおける一要素である「社会化 (socialization)」が時間の経過という歴史に共通のプロセスを踏まえること、また、コンストラクティヴィズム出現以前の歴史研究に、イメージ、規範、アイデンティティなどの ideational な側面を扱ったものが蓄積されていることから、コンストラクティヴィズムと歴史研究には、親和性がみられるという議論を展開した³。

理論と歴史を付き合い合わせ、それを比較検討することには学問的意義が存在するのであり、ひとつの研究テーマとして多くの先行業績が既に存在している。本稿ではやや視点を変えて、歴史学の立場に軸足を置いて理論との接点を考察するものとする。具体的には、第一に歴史研究の立場から理論研究にどのような意義が認められているかを考察する。すなわち、歴史研究に理論が有用だという点において、歴史家の間に同意はあるのか、また理論に言及して歴史研究をおこなう場合、どのように歴史家は理論を自己の研究に反映しているかを検証する。第二には、筆者自身が、自己の研究にどのように理論に言及したかを考察し、また、さらに議論を発展させ、国際関係学における学際的アプローチについて考える。

本論に入る前に、本稿が対象とする「理論」と「歴史」の範囲を確認する。「理論」とはアメリカ国際政治学における主たるパラダイムとし、「歴史」とはアメリカで議論されている外交史あるいは国際関係史という範囲とする。国際政治学理論の中には、批判理論、英国学派、フェミニズムもあるし、他方、歴史研究といってもどの国の歴史研究を対象とするのか、また、外交史と国際関係史を同列に扱うのかといった疑問が当然生じるであろう。本稿では、「理論と歴史の差異、共通性、またその架橋の可能性」といった問題提起が主としてアメリカで行われてきたので、アメリカ国際政治学における主要なパラダイムとそれに言及した歴史研究をまずは考察の対象とする。近年、アメリカの歴史学界ではポストモダニズムの影響を受けて、外交史は少数勢力となり、外交史の分野でも、社会史の影響が強くなっているとされているが⁴、アメリカの外交史学界一般で発表されている歴史研究を対象とし、外交史・国際関係史とする。

1. 歴史研究一般における理論の位置—ひとつのアプローチとしての認識

(1) *Explaining the History of American Foreign Relations*

歴史研究といっても時代により優勢な解釈やアプローチは異なり、また膨大な業績が存在する。これらすべてを渉猟していわゆる「historiography」をマスターし、その中から理論研究の位置付けを確定する作業が望ましいことはいうまでもない⁵。しかし、それは筆者の能力に余ることなので、最近の歴史研究の動向を概観し、アメリカ外交史研究の紹介・入門書ともいえる *Explaining the History of American Foreign Relations* の初版 (1991) と第二版 (2004) を検証する。同書は、アメリカ外交政策の学問分野を「定義する (define)」することを目的とし、「新しいテーマ」や「新規な分析アプローチ」を含む多様なアプローチを紹介するとことわっている。

この初版には、様々なアプローチを説明する章が十二設けられているが、その内、五つの章が、国際政治学の理論に関係するものともいえる。その内訳は、「国際関係論モデル」、「世界システム論」、「従属論」、「勢力均衡」、「国家安全保障」、である。加えて、国内政治にかんする政治学理論である「官僚政治」

や「コーポラティズム」の章も設けられている⁶。第二版では、一七の章の内、四つ、「国際関係理論」、「国家安全保障」、「世界システム論」、「従属論」が国際政治の理論篇といえ、また「官僚政治」、「コーポラティズム」、「近代化理論」も含まれている。初版と第二版を比べると、第二版は「記憶」、「ジェンダー」、「人種」の章も含まれ、より多様化された印象を受ける⁷。

この中の「国際関係論モデル」と題された章は、初版、第二版ともにホルスティ (Ole Holsti) が執筆している。その冒頭には、大学の組織にあっては政治学と歴史学は異なるディシプリンと分けられているが、近年政治学者の中で、理論と歴史研究をつき合わせた研究がなされており、両分野の意見交換を促進するためにも、歴史家に国際政治学の理論を説明するとその主旨が書かれている。第二版では、国際政治学理論の動向をふまえてコンストラクティヴィズムについて独立した節が設けられているのが目新しい。

ホルスティは、個々の理論を紹介するが、歴史家がどの理論を使うかについては、明確な示唆を与えてはいない。国際政治学者として、ひとつの理論に同意できないのであり、したがって歴史家は「何のためのモデルかを考えること」が必要であり、あくまで歴史家は便宜的に何かを説明したいときに理論を使うことが可能だと示唆する。たとえば、「グローバル社会・複合的相互依存モデル (Global-Society/Complex Interdependence Model)」は、国際社会システムの発展に興味のある歴史家には有効である。他方、「マルクス主義、世界システム、従属論モデル (Marxist/World System/Dependency Model)」については、どのように歴史家にとって魅力があるか定かではないと、ホルスティは書く⁸。しかしながら、現実に歴史家マコーミック (Thomas J. McCormick) はこれを下敷きにアメリカ外交を論じており、一部の歴史家にとっては十分に役に立つ理論であったことは指摘してよいであろう。

ホルスティは歴史と理論という線引きは堅持した上で、理論が歴史にどのような意義があるかを考えるのみならず、歴史家が理論に何が貢献できるかをも考えるべきだとする。「政治学者が外交史家のために何かできるかと問いかけるのみではなく、歴史家が政治学者に何が貢献できるか問いかけよ。少なくとも、外交史家が政治学のモデルを用いてその特質や限界を検証するならば、政治学者は多くを学ぶはずである」と記している⁹。

(2) 理論言及グループ

理論を用いることが、外交史・国際関係史におけるひとつのアプローチであり、歴史の議論を構築する上で、説明の道具立てとして理論的枠組を提示することに一定の了解があるとしても、歴史家の個別研究に、どれほど理論が言及され、敷衍されているのであろうか。筆者が、アメリカ外交史学会 (Society for Historians of American Foreign Relations) の機関紙 *Diplomatic History* を 1990 年から概観した限りにおいて、理論を前面に押し出し、理論に明示的に言及している研究は、多くはなくむしろ少数と思われた。このような歴史と理論の関係をめぐる現状を大別するならば、理論に明確に敷衍した歴史研究、理論をある程度理解した歴史家が書いた歴史研究、理論という学問分野とは完全に独立して書かれた歴史研究という分類がありえるかと思う。しかも、圧倒的に多いのは、理論とは関係なく書かれた歴史研究である。一般的には、歴史研究は国際政治学理論なくとも自律的に成立しており、何ら痛痒を感じてはいない。

これは、アメリカでは、大学の制度上、外交史・国際関係史がむしろ歴史学に属し、歴史学科で教育や研究が専ら行われてきたという事情にも関係すると思われる。また、国際政治学が政治学の下位分野として発達してきた経緯が生み出した知的状況でもある。しかしながら、国際関係論という大きな枠組でくくってしまうことが可能となれば、このような色分けの境界は、もう少し曖昧なものとなるかもしれない。

2. 理論言及派の歴史研究

次に、*Diplomatic History* や *Explaining the History of American Foreign Relations* において、理論に明示的に言及する歴史家としてペルツ (Stephen Peltz)、レフラー (Melvin Leffler)、また、歴史家ながら、*International Security* 誌等において理論と歴史について寄稿してきたギャディス (John Lewis Gaddis) を個別に考察し、彼等の歴史研究において理論がどのように位置付けられているかを検討する。

(1) ペルツ

ペルツの初期の著作は、歴史として真珠湾へ向かう軍備競争を論じているが¹⁰、近年では歴史家としては、かなり明確に理論を使う研究を発表し、理論についての自分の考えを披瀝している。

ペルツは現在のアメリカ外交史学界の現状に好意的ではない。現在の状況は、社会学的、文化的、言語学的な影響が強まり、「分裂」的状況を呈している。このような状況では、「分析的歴史」を書くことはできないのである。彼にとっては、「分析的歴史」に対峙する概念は「叙史的歴史」である。より優れた外交史を書くためには政治学との共同作業が望ましく、実証主義的方法論を有した分析的歴史が望ましい。「より優れた外交史研究の発達のためには、社会的、文化的、言語学的あるいは叙史的(narrative)アプローチよりも、政治学の諸方法論の方がはるかに有効であると論じる」¹¹ と、立場を明確にしている。

彼は、外交史の主たる分析対象である政策決定過程を重視し、政治家の意図を探求する。また、政策決定者の選択肢に影響を与えるさまざまな要因を重視するため、分析レベルの問題にも焦点をあてる。ペルツにいわせるならば、これらはたとえば、「外的環境要因」「認識された外的環境要因」、「国内環境要因」、「認識された国内環境要因」、「政策決定者の選択肢を形成する政府内の要因」、などであり、これを多変数分析とする。ペルツは、「事例研究」という言葉を使い、「このアプローチを用いることにより、国際関係史家はより系統的で蓋然性の高い説明をすることが可能になるかもしれない」と論じ、「説明」することに重きを置いている。また、「こうした理論的手法を採用することにより、我々歴史学者は構造的要因に敏感となり、原因における意図や偶発的出来事の過大評価を避けることができ、さらにみずからの分析能力を高めることができる」と記し、あくまでいかに客観的に説明できるかということに彼の主眼があるようである¹²。

ペルツは、歴史家としてのアイデンティティにこだわりつつ分析的歴史を目指すが、彼の業績が優れて歴史のかどうかについては議論の余地があるかもしれない。彼は、かねてより外交史を論じる上で、「分析のレベル」を重視し¹³、それを発展させて、「国際システムの変化」と題された論文を *Diplomatic History* に寄稿している。しかし、同誌の一般的傾向の中ではむしろ特異な論文という印象を受けるし、

彼が謝辞で名前をあげているのもホルスティやイマーマン (Richard Immerman) などの国際政治学者である¹⁴。

この論文では、国際政治学理論を使って、「国際システム」がどのように機能しているかを論じ、この国際システムがアメリカの政策決定者にどのように影響を与えたかを考察するが、ギルピン (Robert Gilpin), ウォルツ (Kenneth Waltz), クラスナー (Stephen Krasner) など、国際政治学理論の文献も多く引証されている。実証の部分では、ペルツは、国際システムを 1648-1793, 1815-1892, 1793-1815, 1917-1945, 1892-1914, 1945-1965, 1976-1976 の六時期に分類し、このシステムがアメリカの政策にどのような変化を与えるかを考察する。システム変化は、経済力、軍事力におけるテクノロジー、革命によってもたらされ、これらシステムが、外交政策に促進要因として働いたり阻害要因となると論じる。

ペルツ論文については、同じ号の *Diplomatic History* にホルスティがコメントを寄せ、二つの点で評価している。第1に、外交史家に、グローバルな文脈の重要性を想起させる。しかも、システム変化を追っていることによって、外交史家のみならず国際関係研究者全般にも意義があると論じ、「学際的相互豊饒化 (interdisciplinary cross-fertilization)」であると、その学際性を高く評価する。しかも、理論的貢献としては、ウォルツの「構造的現実主義 (structural realism)」を発展させたと評価する。なぜなら、ペルツはウォルツと異なり、システム変化が起きたことにより、政策決定者の行動が変化したと論じているからであり、ウォルツの簡潔性と洗練性は欠くが、学問としてはひとつ前進であると結論付ける¹⁵。

(2) レフラー：解釈枠組としての理論

レフラーは *Explaining the History of American Foreign Relations* の初版 (1991 年) で、理論の文献としてブザン (Barry Buzan) やウォルツを上げつつ、「国家安全保障」という章を執筆している。この章においてレフラーは、安全保障を「対外的脅威から中心となる価値 (core value) を守る」と定義し、この自己の安全保障概念を「全般的な解釈枠組」とであるとその意義を強調する。なぜならば、この概念は、対外的な側面と、内政的な側面の両者を論じることができ、しかもパワー要因も考慮するので総合的 (synthesis) だとする。したがって、他の分析枠組、コーポラティズムや世界システム論よりも有効に外交政策を説明できるし、また、認識面をも考察の対象に含むので、より総合的な概念だと主張する。認識面では、世界システムをアメリカがどのように認識したかが、対ソ連認識にもまして重要であったとする¹⁶。

では、レフラー自身の歴史研究において理論はどのように位置付けられているのであろうか。バンクロフト賞に輝いた大著『力の優位』において、レフラーはその学問的意義はリンケージである、と書いている。彼が述べるリンケージとは、実に多面的な様相を呈するものであり、脅威評価と対外政策行動のリンケージ、経済と地政学のリンケージ、工業中心地域と発展途上周辺のリンケージ、軍事的能力と外交上のリスクとのリンケージとさまざまな次元でのリンケージであることを説明する。そして、このような視点は、政治心理学者、経済学者、社会学者の研究を学ぶことなしには不可能であったと率直に述べている。なぜならそのような分野においては、脅威認識、安全保障との関連性が考察され、また、世界の政治経済における従属とヘゲモニーについて論じているからである。自らの分析枠組について語る部分では、ジャーヴィス (Robert Jervis), ウォラースタイン (Immanuel Wallerstein), ギルピンな

などをあげる¹⁷。

『力の優位』では、アメリカの脅威認識に加えて、アメリカが自らに必要なとみなしたパワーは「均衡」状態を保てるだけのパワーではなく、アメリカの「優位」を保証するパワーであったという説が中心的議論となっている。この場合、パワーは、軍事のみならず、経済的な面からも論じられている。他方、「セキュリティ・ディレンマ」についても触れられているが、レフラーの手法は、理論を精緻に論じひとつの命題を作るのではなく、便宜的に自己の議論の裏づけとして用いられているといえる。

さらにレフラーは、アメリカ外交史学会の会長演説でも理論を重視する。アメリカ外交をひとつの理論で説明することはできないが、「理論の有益性」を確信するようになったと述べ、「私にとっては、異なる理論は探求すべき仮説の関係性を教え、私が思いつかなかったような因果関係や相互関係に気付かせてくれる。私が証拠を使う際の枠組として作用する」と述べ、様々な理論から自分がインスピレーションを得たと述べる。リアリズムによって、国際システムについて思い起こし、世界システム論によって国際政治経済への理解が深まり、官僚政治理論によって個々の政府内部の動向が重要なことを学び、認識理論は脅威認識や政策決定について考えさせてくれた、と論じる。レフラーは、自らの学問的立場が折衷主義であることを認め、異なる理論によって異なるパーツを思い起こすとも書いている。このようなレフラーの言明からは、自己の歴史研究について理論を枠組として用いたり、視点を設定する上でインスピレーションを得るために有用だとしており、いわば道具として使っていることがわかる¹⁸のであり、それは以下のような説明にも現れている。

これは折衷主義的な調合であり、完全な外交史を作るレシピではない。しかし現実が一つの理論ではとらえられないほど複雑であるならば、異なる理論によって歴史はある現象、事件、プロセスを精査するとき異なる部分の説明をしてくれる¹⁹

こうして、*Explaining the History of American Foreign Relations* 第二版でもレフラーは安全保障の章を執筆し、「core value」の概念をさらに発展させ、新たな理論的動向として浮上してきたコンストラクティヴィズムの議論を取り入れ、イデオロギーの役割を重視する。アメリカが脅威を感じたのは、経済や領土という物質的側面ばかりではなく、「国家を組織する基盤となるイデオロギー」に対する側面もあると書く。「core value」は死活的利益よりも広い概念と定義し、「アメリカがなぜあのように熱心に冷戦を遂行したかは、アメリカのナショナル・アイデンティティにイデオロギーが果たした役割を理解しなくてはならない」と論じ、自己の議論の方が、世界システム論に基づくマコーミックより総合的な面で優れていると書く²⁰。

最近のレフラーの論文では、ブッシュ政権の外交政策が取り上げられており、ブッシュ外交には、歴史的な継続性があり、「先制攻撃 (preemption)」や「一国主義 (unilateralism)」は新しいものではないと論じている。また、アメリカ外交においては、脅威、国益、理念、パワーが常に絡み合っていたとも指摘する。この論文では、理論への明確な言及はみられないが、脅威認識が高いときには、レトリックの重要性も高くなり、理念や価値を強調するという説を提示している。このような命題は「限定的一般化」

といえるものであり、その限りにおいて彼の叙述は分析的であるとも考えられる²¹。

(3) ギャディス：理論から歴史への回帰

冷戦史家として名高いギャディスも、国際政治学理論に理解を示し、またアメリカ外交史の方法論についてその考えを披瀝してきた。1987年の論文では歴史研究と政治学の違いを指摘しつつも、一次資料の重要性という点からそれらを架橋する可能性について論じている²²。

しかしながら、後の著作では、ギャディスは自己の歴史研究における理論について、一貫性のある立場をとっていないと思える部分もある。たとえば、『今明らかになったこと』について、ギャディスは、「私は、理論、少なくとも国際政治学の理論に囚われずに、この本を書き始めたことを告白しなければならない」、「素直」に歴史を書けたことにほっとしている²³と理論の影響については否定的である。しかし、『ロングピース』では、ギャディスは、ウォルツの二極安定論にインスピレーションを受け、それから自己の議論を発展させていったと記している。ただし、理論と歴史の二つのアプローチが異なることについては十分に認識し、それを踏まえた上で冷戦史を書いたとする。また、自己の歴史的分析から、ウォルツはパワーの種類について充分考察しなかったとその理論の問題点を、ギャディスは指摘している²⁴。

冷戦の終結とともに、ギャディスは国際政治学理論がそれを予見できなかったことから、理論の予見可能性に批判的な論文を発表している。国際政治学理論を3つのパラダイム、行動科学的アプローチ、構造的アプローチ、進化的アプローチに分類し、その3つの内容を分析し、そのそれぞれが冷戦の終結を予測できなかったと検証する。さらに、国際政治学は、物理学などの自然科学が「厳密な(hard science)」であるのに比して、「ゆるやかな科学(soft science)」であることを踏まえるべきであり、また、国際政治学が対象とする「分子(molecular)」すなわち国家などのアクターは「思考するユニット」であるから、価値を捨象してきた国際政治学には問題があると指摘した²⁵。

ギャディスは、歴史学も国際政治学も、実験において法則を見出せるような科学とは異なるものである。したがって、「社会科学における独立変数を探す試みは成功し得ない」²⁶と国際政治学が理論命題を作りそれを検証するようなことが果たして可能かと懐疑的立場を表明するようになった。

最近のギャディスはより歴史学への志向を明確にし、国際政治学との相違を率直に披瀝していると思われる。「歴史学者にとって、国際政治学の手法は受け入れがたいものとなっている」と書き、政治学者は、予測や政策提言をいとわれないが、「多くの歴史学者は、十字架をつきつけられた吸血鬼のように、こうしたことに関わろうとはしない」²⁷、とその立場の違いを明確に指摘している。また、国際政治学者と出席した会議において、「事例研究」によりどのような「変数を導き出せるか(tease out)」といった言葉遣いに違和感を覚えたとも記している²⁸。

そのようなギャディスの歴史への回帰は、歴史的方法論についての著作『歴史の情景』に至る。この著作は一枚の絵画とその描写の説明から始まる。それは、一人の男性が荒れ狂う海に向かって背を向けて立っている情景を描いたものである。ギャディスは、海に向かって情景を眺めている男を描いたこの絵画は、歴史家が情景を「represent(描き出す)」作業に比することができると論じる。歴史を書くとは、ある種の「戯曲化」であり、それは歴史家にとっての事実の取捨、叙述のスタイルなど、多くの作業を必要とする。

また、歴史とは単純な営みではなく、むしろ複雑なそれであることも述べている。

過去とは風景のようなものであると考えるならば、歴史家とは相反するような二つ立場をさまよいつつその中で自分の位置を見出すことでもある。それは、重要なことと瑣末なこと、対象との距離感と同時にのめりこむこと、支配と畏怖の念、冒険と同時に危険を感知すること。このような一見すると相反するような二極の間のどこかにとどまることが、歴史の認識である²⁹

このようにギャディスは、最近では国際政治学理論と歴史学とは異なることを明確にし、また、理論の限界についても明確に意識するようになってきた。しかし、その後の彼の歴史叙述に、理論やその概念が全く触れられていないかというところでもない。その新著『冷戦：新しい歴史』において、冷戦の起源を論じる部分で、米ソが不信感を募らせていったという議論をギャディスは展開するが、この相互不信が高まっていった状況を説明するときに、「政治学者は『セキュリティ・ディレンマ』にしばしば言及する」と記し、政治学の概念を持ち出し、それに説明を肩代わりさせている。この部分で、彼が注にあげているのはジャーヴィスの著作である³⁰。また同書の巻末参考文献にも、ウォルツの『国際政治学の理論』が記載されている。

ギャディスは、ベルツやレフラーにくらべると、歴史学者としてのアイデンティティを前面に押し出すようになっているし、理論に直接言及する度合いは弱くなってきているようにも思う。しかしながら、理論を学んだことを全く捨象して歴史を書いているかとはいえない。

(4) その他の歴史家における理論

メイ (Ernest R. May) や入江昭は国際政治学理論を明示的に用いる歴史家ではない。ときには、国内政治の理論であったり、他の分野での理論であったりするが、理論を全く無視してはいないと思われる。

メイは『アメリカ帝国主義』において、政策転換が起きる際には、オピニオンリーダーや世論の態度が変化するはずであるという仮説をたて、それを事例にもとづいて検討した。メイの研究は「一般法則」の構築と言うよりも、限定的一般化の範疇であると指摘されているが³¹、しかしそれでも彼の歴史は他の歴史家よりも「分析的であり、政治学のスタイルに近い」とも指摘されている³²。メイの他の著作からしても、理論への言及度はそれほど明示的とは思われないが、「中程度の一般化」のために、メイは理論にも目配りをはかっている歴史家といえるかもしれない。

入江昭も全く「理論」に全く無頓着な歴史家とは思われない。彼が言及する理論は国際政治学理論に限定されるものではなく、また、その使い方も非常にゆるやかであるが、それでも理論への引証は皆無ではない。筆者の大学院時代にも、モムゼン (Wolfgang J. Mommsen) *Theories of Imperialism* が必須文献であったし、最近の著作『グローバル・コミュニティ』にも、ミトラニー (David Mitrany) やコヘイン・ナイ (Keohane and Nye) がその序章の冒頭の注に言及されている³³。「パワーと文化」といった視点も、そもそも理論に全く無関心であるならば、あるいは「一般化」に全く関心がないのであるならば出てこない視点かもしれない。他方、大学院時代に彼が必須文献として読ませたもうひとつの極は、「叙述的歴史」であったようにも思う。経験的推測の域を越えるものではないが、彼が学生に要求したこ

とは分析的歴史と叙史的歴史のバランス、あるいはその折衷であったのかもしれない。

理論を用いる際のもうひとつのスタイルは、自己の研究立場を明確にするというやり方であり、マルクス主義や世界システム論の見地から、視点を設定し枠組を作り上げるものであろう。たとえば、マコーミックは世界システム論を基礎にアメリカ外交を分析した³⁴。また、ニューレフトとして、アメリカの対外政策に批判的見地を示したカミングス (Bruce Cummings) は、「理論の貧困」を問いかけ、冷戦史におけるポスト修正主義の保守的傾向に警鐘を鳴らし、知識人の役割を問うた³⁵。

ここまでの議論をまとめてみると、国際政治学理論に言及したり、それを枠組として用いることは、アメリカ外交史における多様なアプローチの一つとして受け取られている一方で、理論の用いられ方は一様とはいえない、ということになる。総じて、歴史家が理論に言及する際の立場は、以下のようなものとなるであろうか。

1. 明確に理論的命題の論証を計る：たとえば、ペルツ
2. 折衷主義的な使い方（分析枠組を作るためやインスピレーションを得るために用いる。この場合、理論をどれほどの重要性をもって言及するかは、歴史家により異なる）：たとえば、レフラー、ギャディス、メイ、入江
3. 立場を定める（マルクス主義、世界システム論）：たとえば、マコーミック、カミングス

3. Inter (multi) disciplinary approach — 「こうもり」学派

前節において歴史家がどのように理論に言及してきたかを論じてきたことを踏まえ、歴史家としての筆者の研究における理論の位置付けを振りかえり、さらに、議論を発展させて国際関係論における学際アプローチについて考えてみたい。

(1) 理論の視点

「アメリカ正戦論」³⁶ というテーマの論文を書くにあたって、筆者は二つの次元で、国際政治学理論に言及した。この論文の主題は、なぜアメリカは二十世紀になって戦争を受け入れやすくなってきたかというものである。それを考えるにあたり、アメリカのナショナル・アイデンティティのなかに戦争を 수용する傾向があるのではないかという問題意識を抱いた。このような視点は、カツェンスタイン (Peter Katzenstein)、バーガー (Thomas Burger) などのコンストラクティヴィズムによる研究、日本が武力行使になぜ消極的なのかという研究にヒントを得たともいえる³⁷。戦後日本が武力行使に否定的な態度を形成してきたことは、第二次世界大戦の経験や憲法 9 条という点から、日本では経験的にまた歴史的に理解されている事象である。しかしながら、カツェンスタインらの研究は、日本を事例として理論研究の視座からこれを分析しており、理論が一般化を指向している限りにおいて、アメリカに応用することは決して驚くべきことではない。実際、このような論点を踏まえて、ナウ (Henry Nau) が、アメリカのアイデンティティについて論じている。ナウは「武力行使を正当化できるか（武力行使をする能力だけでなく）どうかは、国家のアイデンティティそのものである」と論じており³⁸、筆者はこれを自己の研究の枠組とした。

第2には、アメリカの戦争受容アイデンティティを構成する要素の一つとして学問的合理性をとりあげ、戦後アメリカ国際政治学における戦争の位置付けについて、一般的で問題提起にとどまるものではあるが、考察を試みた。最近でも主たる国際政治学者が戦争は国際関係には避けられないという立場を表明した事実³⁹や、「デモクラティック・ピース」論における戦争の取り上げられ方からして、戦争について学問的な側面からその不可避性を認めているのではないかと論じた⁴⁰。このような視点を得るにあたっては、アメリカ国際政治学についてのある程度の理解が前提となったことはいまでもないが、ウィーヴァー (Ole Weaver) による国際政治学のアメリカ的特徴を論じた論文や、コックス (Robert Cox) による理論のイデオロギー性を批判する論文に示唆を受けた⁴¹。

他方、戦争受容性という筆者が理論に言及して提起した枠組は、既に歴史学分野において実証的に研究されており、アメリカの戦争観という枠組と重なる部分があることも事実である。筆者も、先行業績であるシェリー (Michael Sherry)、ベースヴィッチ (Andrew Bacevich)、油井大三郎の文献を下敷きにした⁴²。しかし、理論の視点を導入したということは、それが歴史研究や地域研究に付随する個性から一歩踏み出し、一般化へ向けての妥当性を担保することにつながったともいえないであろうか。このような意味では、理論からインスピレーションを得つつ、自己の視点を一般化し裏付けるために理論に引証してきたといえるであろう。

(2) 歴史、地域研究、国際法、国際政治学：国際関係論におけるディスシプリン

次に、筆者の経験をもとに、理論と歴史の枠組をやや超えて学際的研究の可能性を論じてみたい。戦間期の国際法学者を論じた『戦争の法から平和の法へ』⁴³は、筆者が当初、予想した以上に学際的研究として受け止められた。この研究は、国際法学者の歴史研究として出発したが、彼等の果たした役割の全体像を「描き出す」ためには、彼等の思想や議論の分析といった思想史的アプローチのみならず、政策へのはたらきかけや、日米での国際法学の相違にも触れる必要があった。国際法学者の学説をとりあげるから、国際法学の分野に「またがる」ものであることは認知していたが、むしろ研究の原点としては、国際法学者を歴史的にしかも「叙史的」に描くことが目的であり、それに力を注いだつもりである。したがって、国際法学においては国際法学者の歴史というかなり周辺部に位置するテーマであり、国際法学者の書簡などを探し出し、実際の彼等の思考や行動まで論じたことでアプローチとしての新しさがせいぜい認められるかもしれないといった程度の認識しか、当初はなかった。しかしながら、その後、この研究が有した学際性に連なる文脈で研究が発展し、たとえば「学説・国際法学者の役割」⁴⁴といったテーマへ展開したことは、筆者が明確には意識してはいなかった論点が学際性の中にいわば潜んでいたということである。自らの自己規定や出発点は歴史学であったが、その学際的アプローチの結果は、関連分野での関心やテーマを呼び起こすことがありえたことを、筆者は経験上学んだのである。これは、ホルスティが提示したような「学際的相互豊穡化」といってよいのであろうか。

国際関係論は、「理論」、「歴史」、「国際法」、「経済」という分類のように、各学問分野から成立するとかねてから規定されてきた。しかも、こういった国際関係学における学際性という特徴づけは、日本における国際関係論の発展にみられる特徴だとされている。

しかしながら、ディスシプリンどうしがどのように関係するかについてはいまだ一定の説明はされて

いないし、今後その学際的性格について明確な説明が構築されるとは思われない。それほど、国際関係論が基盤とするディシプリンは、あるときは錯綜しあるときは並存するといったようにその規定は困難なものである。「ディシプリンの対話」という文脈での説明の仕方は、一応、ディシプリンに境界を引くことが可能だという前提に基づいている。この場合、前記の理論と歴史といった提起の仕方と同様に、ディシプリン間の境界を設定しつつそれを架橋する方法論を求める見方である。

しかしながら、明確に区切られた学問分野の総合ではなく、複数のディシプリンが混在一体化し、様々な色が重なったレンズ（学際ディシプリン）を用いて事象（国際関係）をみるといったように、その学際性が説明される場合もある⁴⁵。つまり、ある研究者にとっては、自己の基盤とする学問分野が、歴史や政治学や法学などに分けられるものではなく、分かちがたいほど一緒になっている場合もあるということである。

たとえば、インソップの寓話の例をもちだすならば、「こうもり」学派というものが存在するかもしれない。すなわち、ねずみでもつばめでもなく、両方の特徴を併せ持った種という規定である。このような「こうもり」学派は、うまくいけば「学際的相互豊穡化」につながる場合もあるが、筆者は「政治学とほぼ同じ量の歴史学の文献を読み」⁴⁶といった研究態度の広さと深さにはとても追いつかないわけであり、学際学派は単一ディシプリン学派にくらべてある種の「浅さ」を覚悟しなければならないと思われる。たとえば、筆者としても国際法学において中心的課題とされる実定法解釈に携わったことはないし、国際政治学理論でなされる命題を構築しその検証をはかるといったことをやっているわけでもない。しかし、境界に在ることで見えること、あるいは境界という一歩引いた視点から相互の分野を見ることで、相対化できることもあるかもしれないし、また、境界領域という「潮目」にはそれこそ暖流と寒流が交わるように、面白いテーマが潜んであることもある。

「こうもり」はつばめにもなれないし、うさぎにもなれない。そういう種類の「生き物」であるように、学際的アプローチを全うしたいと思いつつ、学問的アイデンティティ・クライシスに陥ることも多々ある。他方、自らが学際学派であることは認めつつも、根幹は歴史学者の部分捨てること決してないであろう。

(3) discipline vs. issue

以上のように、国際関係論においてディシプリンとは何か、またそれを使って自己の研究を進めることはどのような意味があるのか、という問いかけが重要である一方で、国際関係論においては「issue-oriented」、すなわち問題の解明が中心でありディシプリン規定が必ずしも明示的でないといった研究の方向性を示す形容もある。具体的には、人権、環境、平和などのテーマをとりあげ、それを掘り下げることに優先順位があり、それが政治学、国際法学などのディシプリンを基盤としているのかについて、明確な位置付けを指向しない研究である。では、ディシプリンと「イシュー」はどのように関係付けられるのであろうか。

こういったある問題の解明に優先順位を置く場合とて、全く既存の学問体系すなわちディシプリンが全く無意味であるとか、必要ないということにはならないであろう。しかしながら、ある問題、たとえば人権や安全保障などについて、ディシプリンを全く射程に入れることなく議論することは不可

能ではないかもしれない。その場合、課題について情報の提示や一定の分析をすることはできるであろうが、それを「国際関係学における学問的研究」にどのように位置付けることができるかは、議論の余地があるであろう。

筆者は研究の方向性として上述のように、ある程度明確な意識を以って学際アプローチを用いた上で研究してきたが、この場合に issue として取り上げてきたのは「戦争」であった。『戦争の法から平和の法へ』においては、国際社会における戦争についての法的枠組の変化、また国による国際法観の相違を論じ、「アメリカ正戦論」においてはある特定の国におけるアイデンティティと戦争の関係性について論じた。このように筆者が issue としての戦争を取り上げる際には、なぜ戦争が起きるのであるのかという問いかけをしてきたわけだが、こうして学際的アプローチをとって戦争の問題を研究してきたことは、戦争の理解にどのような貢献をしたといえるのであろうか。

そもそも戦争原因については多くの先行研究が存在するし、また、この問題についての研究者のアプローチも一様ではない。筆者が用いた学際的アプローチが果たして「学際的豊穡化」に結びつき、戦争という issue の理解に一助になったかは研究の評価に委ねるべき問題であり、筆者が自ら判断できるものではない。しかし、少なくともいえることは、学際的アプローチが「学際相互豊穡化」に結びつくか否かの検証は、issue の探求、理解を深めるものであろうし、またそうでなければ意味がないように思われる。

おわりに

外交史・国際関係史に国際政治学理論が有用かどうかについては、一概に答えが出せるものではなく、それは個々の歴史家の志向や選択次第であろう。叙述的歴史が分析的歴史に劣っているとはいえ、それは個々の歴史家自身の美意識によるところが大きいであろう。しかしながら、国際関係論という学問領域に属する歴史家として自己規定するのであるならば、「理論」は有用な「道具」たりうるといえる。「国際関係論における歴史」をそうでない歴史、たとえばひとつの「国」とどまる範囲での「政治史」や「社会史」と差別化するのであるならば、理論の視点は役に立つであろう。

また、国際関係論が、複数のディシプリンから成立し、しかもその学際性がひとつの特徴だと規定するならば、ディシプリンを意識し幾つかのディシプリンを重ね合わせて自己の研究を展開することは、望ましいことでありこそすれ、害のあることではないであろう。むしろ、そのような複数のディシプリンを使いこなすことはたやすいことではなく、該当ディシプリンの修得に加えそれを重ね合わせることについての注意深い操作も必要になる。しかし、そのように複雑な営みであるからこそ、国際関係論を研究していく醍醐味があるのかもしれない。

注

- 1 コリン・エルマン/ミリアム・フェンディアス・エルマン編、渡辺昭夫監訳、宮下明聡、野口和彦、戸谷美笛、田中康友訳『国際関係研究へのアプローチ』（東京大学出版会、2003年）。
Colin Elman and Miram Fendius Elman, "Diplomatic History and International Relations Theory: Respecting Difference and Crossing Boundaries," pp. 5-21; Jack S. Levy, "Too Important to Leave to the

- Other: History and Political Science in the Study of International Relations,” pp. 22–33; Stephen H. Haber, David M. Kennedy, and Stephen D. Krasner, “Brothers under the Skin: Diplomatic History and International Relations,” pp. 34–43; Alexander L. George, “Knowledge for Statecraft: The Challenge for Political Science and History,” pp. 44–52; Edeard Ingram, “The Wonderland of the Political Scientist,” pp. 53–63; Paul W. Schroeder, “History and International Relations Theory: Not Use or Abuse, but Fit or Misfit,” pp. 64–74; John Lewis Gaddis, “History, Theory and Common Ground,” pp. 75–85, *International Security*, Vol. 22, No. 1 (Summer, 1997).
- 2 Schroeder, “Historical Reality vs. Neo-realist Theory,” *International Security*, Vol. 19, No. 1 (Summer, 1994): pp. 108–48.
 - 3 篠原初枝「コンストラクティヴィズムと歴史研究—接点あるいは親和性」『アジア太平洋討究』8号（2005年）。
 - 4 アメリカ外交史の危機的将来性を指摘するものとしては、たとえば、Lawrence Gelfand, “The Changing Discipline of American International History,” *Diplomatic History*, Vol. 31, No. 3 (June 2007): pp. 381–82 参照。
 - 5 アメリカにおける歴史研究の動向を紹介したものとして、M. J. Hogan, ed., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941* (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1995)。また、アメリカにおける歴史研究も含めた国際関係研究の一般的動向を手際よく総括したものとして、西崎文子「国際関係」五十嵐武士、油井大三郎編『アメリカ研究入門』第3版（東京大学出版会、2003年）。
 - 6 Michael J. Hogan, Thomas G. Paterson eds., *Explaining the History of American Foreign Relations*, first edition, (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 1991).
 - 7 Michael J. Hogan, Thomas G. Paterson eds., *Explaining the History of American Foreign Relations*, second edition, (Cambridge, UK: Cambridge University Press, 2004).
 - 8 Ole R. Holsti, “Theories of International Relations,” in Michael J. Hogan, Thomas G. Paterson eds., *Explaining the History of American Foreign Relations*, second edition, pp. 51–90.
 - 9 *Ibid.*, p. 89.
 - 10 Stephen E. Pelz, *Race to Pearl Harbor: The Failure of the Second London Conference and the Onset of World War II* (Cambridge: Harvard University Press, 1974).
 - 11 スティーヴン・ベルツ「新しい外交史の構築へ向けて—国際政治の方法論に万歳二唱半」, エルマン編, 72頁。この論文において、ベルツは叙史的歴史がどのようなものを指すかは明確にはしていない。しかしながら、筆者が判断する限りにおいて、叙史的歴史としては、たとえば、ダワーの業績が挙げられる。ダワー、『敗北を抱きしめて』（岩波書店、2002年）。
 - 12 ベルツ、前掲、89, 93, 95頁。
 - 13 Pelz, “A Taxonomy for American Diplomatic History,” *Journal of Interdisciplinary History* 19 (Autumn 1988): pp. 259–76.
 - 14 Pelz, “Changing International Systems, the World Balance of Power and the United States, 1776–1976,” *Diplomatic History*, Vol. 15, No. 1 (Winter 1991).
 - 15 Ole R. Holsti, “International Systems, System Change, and Foreign Policy: Commentary on ‘Changing International Systems,’” *ibid.*, pp. 83–89.
 - 16 Melvyn P. Leffler, “National Security,” pp. 202–213 in *Explaining the History* (1991)。彼が引証した理論の著作は、Barry Buzan, *People, States, and Fear: The National Security Problem in International Relations* (Brighton, 1983), Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, MA, 1979), Robert Gilpin, *War and Change in World Politics* (New York, 1981) など。
 - 17 Leffler, *A Preponderance of Power: National Security, the Truman Administration and the Cold War* (Stanford: Stanford University Press, 1992), ix–x; 彼があげたのは Robert Jervis, *Perception and Misperception* (Princeton: Princeton University Press, 1976); Richard Ned Lebow, *Between Peace and War* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1981); Jervis, Lebow, and Janice Gross Stein, *Psychology and Deterrence* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1985); Alexander George and Richard Smoke, *Deterrence in American Foreign Policy* (New York: Columbia University Press, 1974); Immanuel Wallerstein, *Capitalist World Economy* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979), Charles Kindleberger, *World in Depression* (Berkeley: University of California Press, 1973); Robert Keohane, *After Hegemony* (Princeton: Princeton University Press, 1984); David Calleo, *Beyond American Hegemony* (New York: Basic, 1987); Robert Gilpin, *War and Change* (New York: Cambridge University Press, 1981), など。Leffler, footnote #2, p. 523.
 - 18 Leffler, “New Approaches, Old Interpretations, and Prospective Reconfigurations,” *Diplomatic History*, Vol. 19, No. 2 (Spring 1995), p. 179.
 - 19 *Ibid.*

- 20 Leffler, "National Security," *Explaining the History of American Foreign Relations*, second edition, p. 131.
- 21 Leffler, "9/11 and American Foreign Policy," *Diplomatic History* Vol. 29, No. 3 (June 2005): pp. 396, 406.
- 22 John Lewis Gaddis, "Expanding the Data Base: Historians, Political Scientists, and the Enrichment of Security Studies," *International Security*, vol. 12, No. 1 (summer, 1987): pp. 3–21.
- 23 ギャディス「限定的一般化を擁護して」、『国際関係研究へのアプローチ』203頁。
- 24 Gaddis, *The Landscape of History: How Historians Map the Past* (Oxford: Oxford University Press, 2002), pp. 65–67.
- 25 Gaddis, "International Relations Theory and the End of Cold War," *International Security*, Vol. 17, No. 3 (winter, 1992–1993): pp. 5–58.
- 26 Gaddis, *Landscape*, p. 91.
- 27 ギャディス「限定的一般化を擁護して」222頁。
- 28 Gaddis, *Landscape*, p. 53
- 29 Ibid, p. 129.
- 30 Gaddis, *The Cold War: A New History* (London: Penguin Books, 2005), p. 26; Robert Jervis, *Perception and Misperception in International Politics* (Princeton: Princeton University Press, 1976).
- 31 ベルツ「新しい外交史の構築へ向けて」, 92頁。
- 32 ジャーヴィス「国際関係史と国際政治学」, 『国際関係研究へのアプローチ』268頁。
- 33 Wolfgang J. Mommsen, *Theories of Imperialism* (New York: 1977). 入江が言及したのは D. Mitrany, *The Progress of International Government* (London, 1933), Robert O. Keohane and Joseph S. Nye, *Power and Interdependence* (London, 1989) である。Akira Iriye, *Global Community* (Berkeley: University of California Press, 2002), p. 211, footnote 1 参照。
- 34 Thomas J. McCormick, *America's Half-Century: United States Foreign Policy in the Cold War* (Baltimore, 1989).
- 35 Bruce Cummings, "'Revising Postrevisionism,' or, the Poverty of Theory in Diplomatic History," *Diplomatic History*, Vol. 17, No. 4, (Fall 1993): pp. 539–69. ギャディス, レフラー, カミングスについての論評として, Michael Hogan, "State of the Art: An Introduction," in *American in the World*, pp. 3–15 参照。
- 36 篠原初枝「アメリカ正戦論」, 紀平英作, 油井大三郎編『グローバリゼーションと帝国』(ミネルヴァ書房, 2006年)。
- 37 Peter Katzenstein, *Cultural Norms and National Security: Police and Military in Postwar Japan* (Cornell: Cornell University Press, 1996); Thomas U. Berger, *Culture of Antimilitarism: National Security in Germany and Japan* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1998).
- 38 Henry R. Nau, *At Home Abroad: Identity and Power in American Foreign Policy* (Ithaca: Cornell University Press, 2001), 邦訳, 村田晃嗣, 石川卓, 島村直幸, 高橋杉雄訳『アメリカの対外関与—アイデンティティとパワー』(有斐閣, 2005年)。
- 39 "War with Iraq is not in America's National Interest", *New York Times*, September 26, 2002.
- 40 篠原「アメリカ正戦論」, 179–83頁。
- 41 See Ole Waever, "The Sociology of a Not So International Discipline: American and European Developments in International Relations," in Peter J. Katzenstein, Robert O. Keohane, Stephen D. Krasner eds., *Exploration and Contestation the Study of World Politics* (Cambridge, MA: MIT Press, 1999); Robert Cox, "Postscript 1985" in R. O. Keohane ed., *Neorealism and Its Critics* (New York, 1986). また, 山本吉宣「20世紀の国際政治学—アメリカ」, 『社会科学紀要』第50輯(2001年3月), 同「冷戦後のアメリカ国際政治理論—アメリカの自己イメージを中心として」『国際法外交雑誌』第103巻第4号(2005年1月)も参照。
- 42 Michael S. Sherry, *In the Shadow of War: The United States since the 1930s* (New Heaven: Yale University Press, 1995); Andrew J. Bacevich, *The New American Militarism: How Americans are Seduced by War* (Oxford: Oxford University Press, 2005); 油井大三郎『日米戦争間の相克—摩擦の深層心理』(岩波書店, 1995年)。
- 43 篠原『戦争の法から平和の法へ—戦間期のアメリカ国際法学者』(東京大学出版会, 2003年)。
- 44 篠原「国際法学者・学説の役割—戦争違法化を事例として」『国際法外交雑誌』第106巻第3号(2007年11月)参照。
- 45 山影進「国際関係論—その一つのあり方」, 岩田一政他編『国際関係研究入門・増補版』(東京大学出版会, 2003年)
- 46 ジャーヴィス「国際関係史と国際政治学」, 277頁。